

専用保育園で安心 当直免除の病院も

女性医師の仕事と出産・育児 両立支援します



「たっちゃん得意なの」。ドクターママ・ナーサリースクールでスタッフと遊ぶ子ども

人命を預かり、24時間態勢で勤務を強いられる医療現場。そこで働く女性医師は勤務時間が不規則なうえに、産休や育休が取りにくい、転職に追い込まれるケースが少なくない。だが、医師不足が深刻な社会問題になっているなか、女性医師の仕事と出産・育児の両立を支援しようという動きも始まっている。

【編山智子、写真も】

◆後輩のため

南と西の大きな窓から柔らかな間接照明やコルクの床、家のリビングを思わせる温かみのある空間は、欧米の保育施設を参考にしたという。広さ約260平方メートルある室内は、外来者が入るスペースを中央に設けているほかは、壁も仕切りをできるだけなくし、子どもたち

が思いやり走り回れるようにしている。

大 東京医大などの大学病院に近い東京都新宿区クターママ・ナーサリースクール(定員30人)は、女性医師の子どものための無認可保育園だ。午前7時から午後8時まで保育士や看護師、管理栄養士などが常勤。患者科の医師、勤務医として

根性だけでは解決しない NPOが評価事業

医師らでつくるNPO法人「女性医師のキャリア形成・維持・向上をめざす会(ejnet)」(会員約300人)はこのほど、「女性医師にやさしい病院評価事業」を始めた。女性医師が安心して働ける病院という視点から、同会が病院の勤務体制や育児支援策などを審査、認定する。職場を選ぶ際の基準になるだけでなく、女性が働きやすい病院は男性を含めたすべての医療関係者が働きやすい病院であり、患者もよりよい医療サービスを受けることが出来るとの考えに基づいている。

認定方法は、評価の申し込みを受けた病院に対し、同会が説明会を開いた後に、書面審査を経て現地審査、ヒアリングを実施。現職の女性医師や就労問題に詳しい研究者、法曹関係者らからなる評価委員会が審議し、評価を決めて公表する仕組み。育児・介護中の女性医師への支援体制や代替要員対策、育児などが理由の退職者へのフォローや復職支援などが評価ポイントになる。既に全国4病院から審査申し込みがあるという。

龍野敏子代表理事は「これまで医師の労働環境はあまり注目されてこなかったが、女性医師の割合は今後も増え続けることが予想される」としたうえで、女性抜きには医療現場の人材不足は解決できない現状を指摘。「今の若い女性医師は、仕事もしたいが家庭も子どもも考える。働きたいが無理はしないという人も多い。『根性』では解決できず、具体的な支援策が必要だ」と言う。

【石塚淳子】

◆人材確保に

動きながら「男1女を育てた経験を持つ」。女性医師の場合、研究や臨床の基礎を身に着ける大切な時期が、結婚や出産、育児と重なる。両立が難しく結局、やめてしまった女性医師を何人も知っている。キャリアを中断せず仕事を打ち込めるよう、後輩を少しでも支援したかった」と、理由を語る。

育児中の女性医師を活用するため、勤務先の病院がシステムを作り運用する例もある。

大阪厚生年金病院は04年4月から、育児支援策として「午前9時〜午後5時」「午前10時〜午後4時」といったフレックスタイムや当直免除などの勤務条件緩和と制度を導入している。現在、利用している女性医師は産婦人科、内科、皮膚科など計7人。

10万月の長女を同園に預け、部内の病院に勤務する内科医38は「就学まで安心して預けられるところを探していた。施設にもスタッフにも満足している。自分が受けた、あるいはそれ以上の教育を受けさせたいので、幼児教育の力にキュラムに特に期待している」と話す。保育料は月額20万円。ほかに入園金や施設管理費もかかるが「自宅を毎

日ベビーシッターにみてもらうことや、保育園とシッターの両方を利用する二重保育をすることを考えるなど、妥当な金額だと思ふ」と話す。

熊本大医学部の眼科は、同大付属病院や関連病院で働く育児中の女性眼科医を対象に「午前9時〜午後5時勤務。土日や時間外の出勤なし」という制度を設けた。18人いる眼科医のうち、現在は3人が利用。制度作りを進めた谷原秀信教授は「眼科は女性医師の割合が高く、早めにシステムを整えて医師を確保しなければ、いずれ診療が立ち行かなくなるという危機感が現場にある」と、現実的な取り組みであることを強調する。